

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月24日現在

機関番号：34532

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820075

研究課題名（和文） プルードン思想の着想と展開に関する社会哲学的研究

研究課題名（英文） Social-philosophical research on the concepts and developments of Proudhonism

研究代表者

伊多波 宗周 (ITABA MUNECHIKA)

神戸夙川学院大学・観光文化学部・講師

研究者番号：80608688

研究成果の概要（和文）：フランスの社会哲学者ピエール＝ジョゼフ・プルードンのテキスト読解を行なった結果として、しばしば彼に帰せられていた疎外論の思想家という捉え方は一面的なものにすぎず、むしろ、同時代のフランス・スピリチュアリズムの哲学者たちと似て「力」の概念を基本的着想に備えているという結論を得た。また、自発性の思想家という捉え方を批判する中で、自由主義と社会主義の諸思想の中で占める独特の位置について一定の見通しを得た。

研究成果の概要（英文）：As a result of reading the texts of French social-philosopher Pierre-Joseph Proudhon, we reached the conclusion that the concept of alienation was not his key concept and that the concept of force was much more important for him as was for French Spiritualism in his age. In addition, by criticizing some scholars for regarding Proudhon a philosopher of spontaneity, we came to view him as in a unique position between liberalism and socialism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学、社会思想、19世紀、フランス思想、プルードン、アナキズム、自発性、疎外論

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) プルードン研究には、過去、大きく分けて二つの「波」があった。一つは、20世紀初頭から第一次大戦期にかけてのフランスにおけるもので、ボルシェビズムの波及の中、フランス固有の社会主義理論

を確立しようという傾向が強かった。もう一つは、1960年代から80年代におけるもので、フランスを中心に、日本を含む西側諸国で行われたもので、福祉国家およびマルクス主義のオルタナティブとして、プルードン思想が注目を集めたものである。後者において、前者には見ら

れなかった傾向として、ブルードン思想を疎外論のモチーフで捉えることが一般化した。しかし、少なくとも疎外論でブルードン思想を要約することはできないと考え、テキストの内在的読解をすることで「第二の波」での研究を批判的に検討する必要があると考えた。

- (2) 今世紀の始まる頃から、フランスでは「第三の波」と呼んでよいブルードン研究の盛期を迎えている。基本的には、新自由主義に対するオルタナティブとしてブルードン思想を位置づけるものと見てよい。Édouard Jourdain はじめ、いくつかの注目すべき研究が為されているが、「第二の波」への批判が十分に為されているとは言えない。この新しい研究動向を整理しつつ、博士論文で粗描したブルードン思想の全体像についての解釈を全面的に展開する必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

以下の三つの目的を掲げて研究を行なった。

- (1) ブルードンが人間および社会について、哲学的にどのように捉えていたのかを説明すること。具体的には、博士論文では言及にとどめた、前期の『秩序の創造』(1843)・『経済的諸矛盾の体系』(1846)および、後期の『戦争と平和』(1861)の精読により、ブルードン思想において、人間と自然・神の関係がどのように捉えられているかを明らかにすること。また、大部の著作『革命と教会における正義』(1858)を精読することで、人間が社会をどのように構築しているかを、哲学的に捉えること。その作業の中で、ブルードン思想の基礎的諸概念を抽出し、概念相互の関係について説明すること。
- (2) 他の哲学者・思想家と比べた場合の、ブルードンの特異性はどこにあるのかを説明すること。具体的には、コント、トクヴィル、ルソーに限って、他の哲学者・思想家の著作を精読し、ブルードン思想の特異性を明らかにすること。
- (3) ブルードン思想を前期思想と後期思想に分けることの正当性を確認すること。具体的には、二月革命前後にブルードンが公にした膨大な資料を精査し、二月革命という外的要因によりブルードンがアナキズムの主張を一時的に強め、しかし、その後、思想に内在的な理由によってアナキズムを捨て去るという道筋を確認す

ること。

## 3. 研究の方法

上記目的の達成のため、文献の精読に際してテーマを以下のように設定し、この順序で一定の結論を得ることで、効率よく研究を進展させることとした。

- (1) ブルードン後期の『戦争と平和』における、人間と自然・神の関係について
- (2) 二月革命に対する、ブルードンとトクヴィルの捉え方の異同 -社会的なものと政治的なもの-
- (3) ブルードン前期の『秩序の創造』『諸矛盾の体系』における、人間と自然・神の関係について
- (4) ブルードンとルソーの異同 -なぜ、ブルードンは「意志」や「主権」を批判するのかわ-
- (5) ブルードンとコント -人間の進歩と、秩序の変化の関係について-
- (6) 『革命と教会における正義』における社会像について
- (7) ブルードンの前期思想と後期思想を分ける正当性について

## 4. 研究成果

全体の研究成果については、著作として発表するべく執筆を進めている。本研究を踏まえた新たな研究課題「近代フランスにおける反疎外論的社会思想の論理と系譜についての研究」(課題番号:25870968)の一部成果をも盛り込む形で、2014年度前半の出版を目指している。

以下、前項で示した7つのテーマのそれぞれについて得られた成果と今後の見通しについて簡潔に述べる。

- (1) 『戦争と平和』についてシュミット研究者でもある Édouard Jourdain が論じている箇所を足がかりに、「力の権利」の議論がブルードン思想の中で占める位置について考察した。結果、当初より予想していた「力」の概念の重要性がやはり明らかになり、諸々の政治哲学の議論との本格的比較を行なうべきであるという見通しを得た。「力」の概念の重視は同時代のフランス・スピリチュアリズムとの関係の中で論じられるべきと考え、新たな研究課題の中で、現在、考察を進めている。国内外ともに、ブルード

ンを当時のフランス哲学の文脈の中で捉えようとする研究は（初期社会主義という文脈を除いては）稀であり、本研究での見通しを足がかりに、今後、大きな成果に結びつく可能性がある。

- (2) 二月革命期のブルードンの思想の展開については、初年度に集中的に行い、「ブルードン思想の展開における二月革命期の実践的思考の意義について」と題した論文の主要議論としてまとめた。そこで鍵として「自発性」をどのように整流するのかという発想がこの時期のブルードンに顕著に表れていることを見出した。当初計画していたトクヴィルとの比較も含め、「ブルードンの社会主義と自発性の問題—新自由主義以降にブルードンを読み直す意義」と題して発表する予定である。
- (3) 『秩序の創造』と『諸矛盾の体系』、特に後者については、かなりの時間をかけて精読した。最も難航した作業で、当初考えていたよりも、成果にするためには様々な補助線が必要であることに気づいた。『諸矛盾の体系』第8章のいわゆる「反神論」の議論について、「第二の波」の前に書かれた Henri de Lubac の研究書と対峙し、ブルードンはヘーゲル左派との類似よりも、それへの反発をこそ同箇所に表わしているという見通しまでは得た。出版を予定している著作に置ける最重要の箇所として練り上げ、疎外論者としてブルードンを捉える傾向を相対化する新しいブルードン像の柱となる可能性がある。
- (4) ブルードンとルソーの異同、「意志」「主権」の概念をブルードンが批判する点については、より広く諸政治思想を研究しつつ、考察した。成果の一部を「ブルードンはどのような意味で社会主義者か—サン=シモン主義からの影響と二つのブルードンの理念—」と題した論文の中で示した。「一般意志」の虚構性を非難し、双務的契約で代置しようとする発想こそがアナキズムであるが、なぜブルードンが双務的契約を主張しつつも、後期になるとアナキズムを唱えなくなるのかについては、今後、より広い文脈の中で見る必要がある。
- (5) ブルードンとコントの異同については、当初の計画から変更し、コントに影響を与えたことで知られるサン=シモンとブルードンの比較を中心に据え、コントについては言及に留める形とした。「進歩」

の概念について、『所有とは何か』『秩序の創造』『諸矛盾の体系』『進歩の哲学』『革命と教会における正義』といった著作での扱われ方の違いを整理する作業を行なったが、むしろ鍵となるのは社会主義の構想の根拠そのものの方にあると考え、デュルケームの『社会主義』を参照軸に、どのような意味でブルードンもまた社会主義者なのかを論じた。

- (6) 『革命と教会における正義』の精読の成果は、出版予定の著作の柱の一つとなる。(4)の議論と大きく関わるが、この著作において、ブルードンが国家における「集会的な力」を認めるという転換を行なった点こそ、(7)で見る前期／後期問題によって決定的な意味をもっているという展望をもっている。
- (7) 前期思想と後期思想を分ける正当性については、(5)で述べたブルードンがどのような意味で社会主義者なのかを論じつつ一定の見解を得た。前期のアナキズムと後期のフェデラリズム（連合主義）は、社会主義の本質的特徴である、経済的な事柄の政治的中枢への結合という特徴をいずれも持っているが、その結合のさせ方が異なるのだと論じた。また、特に自発性と計画性をめぐる議論から、今後、より広く、スミスの自由主義の影響を受けつつ社会主義を展開したことの意味について、社会思想史的な解明を行なう必要があると考えており、新たな研究課題の中で引き続き考察する。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①伊多波宗周、ブルードンはどのような意味で社会主義者か—サン=シモン主義からの影響と二つのブルードンの理念—、神戸夙川学院大学観光文化学部紀要、査読無、4巻、2013、掲載決定済

②伊多波宗周、ブルードン思想の展開における二月革命期の実践的思考の意義について、神戸夙川学院大学観光文化学部紀要、査読無、3巻、2012、90-105

〔学会発表〕（計1件）

①伊多波宗周、ブルードンの社会主義と自発性の問題—新自由主義以降にブルードンを読み直す意義、社会思想史学会、2013年10月26日または27日、関西学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊多波 宗周 (ITABA MUNECHIKA)  
神戸夙川学院大学・観光文化学部・講師  
研究者番号：80608688

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし